

## I 調査に至る契機と経過

今回の発掘調査は、県道田丸停車場斎明線の道路改良事業に伴うものである。工事の事業主体は三重県で、県土木部の管轄である。当地の事業紹介をもとに当センターが実施した分布調査および範囲確認

調査により、事業地内約500㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成2年10月1日から平成3年1月13日までの間に実施した。

## II 位置と歴史的環境

発掘調査地は、多気郡山間部を水源地とする外城田川北部に形成された、「玉城丘陵」と通称される丘陵部の東端部付近にあたる。玉城丘陵では古墳が、外城田川流域はとくに中世の遺跡が数多く確認されている地域である。

玉城丘陵では、とくに古墳時代中期初頭から後葉にかけての時期に、全長約75mの造出付円墳である大塚1号墳をはじめとする大形円墳の形成が顕著である。造出付大形円墳の群集地としては、伊勢でも屈指の地域といえる。後期に至ると、大形墳の形成こそ衰退するものの、数多くの群集墳が形成されている。その多くは墳丘の形態から木棺直葬を主体とするものと考えられる。今回の発掘調査地は、玉城丘陵に形成された古墳群の一角である城廻場古墳群の縁辺部にあたる。

飛鳥から奈良時代頃になると、玉城丘陵北端部で土器生産に関わる遺構（土器焼成坑）が数多く確認されており、土師器生産の一大拠点地域となっている。玉城丘陵北端部は『和名類從抄』に記載のある多気郡有貳（有尔）郷で、中世には神宮の役職である「有尔御器長」の活動が知れる地域である。中世の郡郷境は不明確で、有尔郷の範囲は一部度会郡に及んでいる節もある。なお、外城田川流域の奈良・平安時代の状況はよく分からない。

鎌倉・室町期から戦国期に至る中世では、外城田川流域に数多くの集落が形成されている。これは、神宮による神三郡（飯野・多気・度会郡）の直接支配が衰退するに伴い、やや下級の神官である権祢宜層の私領拡大に便乗するかたちで個別の御厨が増加したことが一因と考えられる。外城田川流域は、内宮祢宜である荒木田氏が深く関与した地である。こ

こには神宮領御厨・御園が集中的に存在しており、在所としては現在の大字集落へと継続すると考えられる。当地の中世を考える上で、神宮との関係は極めて重要である。岡村中近世墓群が所在する岡村も、中世の段階には村落として成立していたものと推察される。

南北朝期に至ると、玉城丘陵の東端に田丸城が築かれる。田丸城は同期における南朝方の拠点であり、激しい攻防戦の展開したことが知られている。その後の田丸城は、北畠氏による神三郡支配の拠点となり、北畠氏当主自身が頻繁に利用している。

織豊期に北畠氏が織田氏によって摂取・併呑されると、田丸城は織田氏支配下の拠点となる。神三郡に対する田丸城が果たした機能は、織豊後期に一時的に岩出城（玉城町岩出）に移動するものの、江戸期には再度田丸城が再興され、紀州徳川藩領の政務拠点として機能し続けていた。

玉城丘陵南麓を含む外城田川流域における中世の状況は、以上のように豊富な事例を確認することができる。岡村中近世墓群は玉城丘陵北麓部にあたり、厳密には区分して考える必要もあるが、外城田川流域の遺跡動向とは密接に関係していると思われるであろう。

### <参考文献>

- ・京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成和名類從抄』（臨川書店 1966年）
- ・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊(1991年)
- ・伊藤裕偉「櫛田川流域」（『日本の古代遺跡52三重』保育社 1996年）





第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) 国土地理院 1 : 25,000 「松阪」「明野」「国束山」「伊勢」を使用





### III 検出した遺構

検出した遺構には、岡村中近世墓群に関するものが圧倒的に多い。また、城廻場遺跡・城廻場古墳群に関係するものも少量認められる。

#### 1 岡村中近世墓群

中近世墓に関係する火葬坑は、合計99基検出された。火葬坑の状況は、第1～2表に一覧で示した。**群構成** 調査地は、丘陵東斜面に位置する。全体の地形は、丘陵尾根部分と、その東側に形成されたテラス状の段によって構成されている。テラスは自然地形というよりは、火葬坑群の形成に伴って人為的に造作されたと考えられる。

火葬坑は、丘陵稜線部（A群）と、その東斜面に形成された幅3m程度のテラス状部（B群）に大きく分けることができる。丘陵稜線部に形成された火葬坑は19基、テラス状部の火葬坑は80基で、テラス部の方が圧倒的に多い。群集の状況は、B群では多くの火葬坑が重複して検出されているのに対し、A群では散在しており、重複するものは少ない。また、丘陵稜線部の火葬坑には、鏡が副葬されるもの（S X 50）や、突起を持つ棺（S X 57）など、やや立派な墓が目立つようにもみえる。

**坑の形態** 火葬坑は長方形を呈するものが多く、一部円形・楕円形のものが見られる。長方形のものでは、長軸が70～120cm、短軸が50～80cmのものが圧倒的に多い。特殊なものとして、S X 57のように、突起を有するものもある（第10図）。

ほとんどの遺構は壁面が熱変している。つまり、火葬坑と考えてよい。埋土内からは木炭のほかに釘が出土しているものがあるので、木棺を火葬したものと考えられる。S X 50に副葬されていた鏡は、熱で変形している。これらのことから、副葬品を有した状態の棺を埋置し、それに火を掛けて火葬していることがわかる。すなわち、当地は茶毘の場であることを明瞭に物語っているといえる。また、鏡をはじめとした副葬品や火葬骨は、その一部が収骨されている可能性はあるものの、一定量がそのまま残されていると判断される。したがって、当地は茶毘の場であるとともに、埋葬地としての機能も果たし

ていたと考えられる。

**火葬坑内の施設** 火葬坑内部に礫を伴うものが多い。礫には、土坑下面に並べられた状態で出土していることから、棺台と考えられるもの（S X 70、第11図）がある。この他には、棺の上にあたる位置から大礫が確認されているもの（S X 43・84・87、第11図）や、遺構の底から浮いた状態で礫群が見られるもの（S X 86）などがある。これらは、棺の上を礫で押さえていたものと考えられるが、大石を伴うものについては、棺を封じ込めるといった精神的な意味合いが含まれている可能性も想定できる。

**出土遺物** 出土遺物は全体に少ない。鏡が副葬されたS X 50や、小刀や鎌が副葬されたS X 59・60・83、土師器皿類を伴うものなどもあるが、その数は少なく、火葬坑の多くは副葬品を伴わないものである。そのため、時期不明の遺構が大部分である。

**墓域群の時期** 遺構内もしくは遺構外から出土している土器は、15世紀前半頃から16世紀初頭頃にかけてのものである。明らかに近世の遺構といえるのは、銭貨23枚を副葬したS X 37のみである。したがって岡村中近世墓群は、その多くが中世後期に比定できると考えられる。

**その他** 火葬坑以外の遺構としては、丘陵稜線部にある溝S D 100がある。長さ約6mである。遺構の性格はよく分からない。

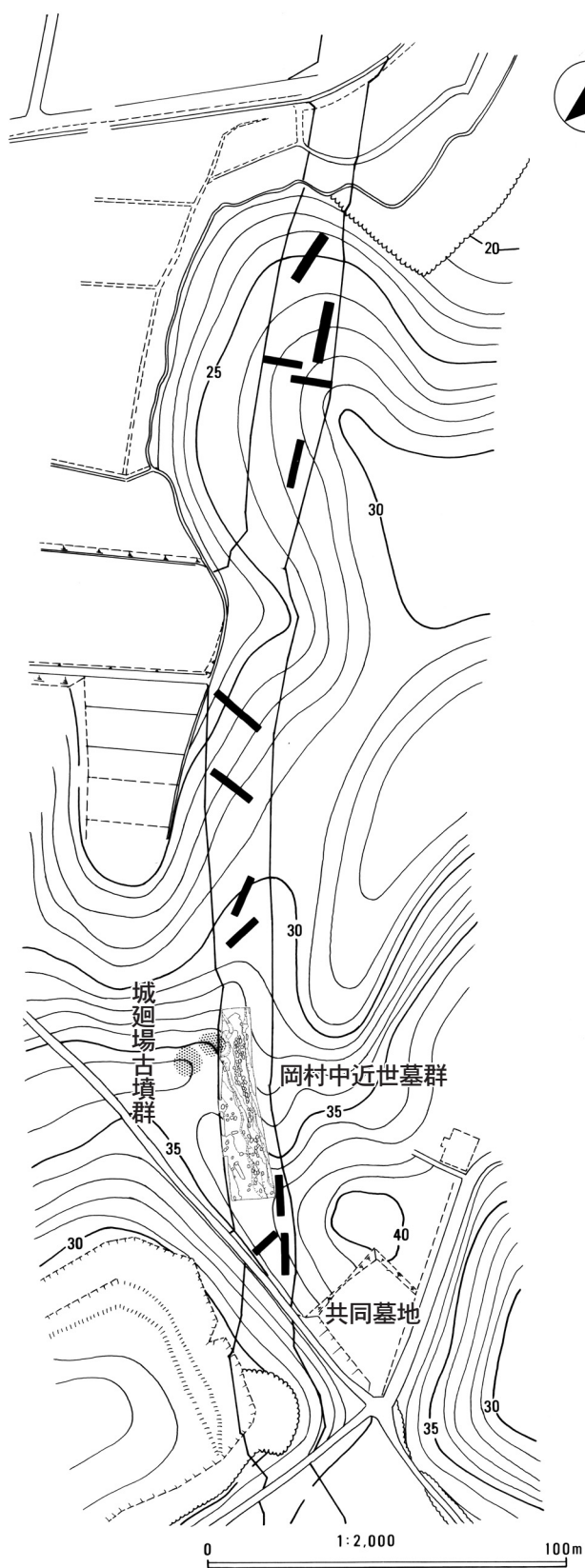
#### 2 城廻場遺跡

城廻場遺跡に相当する遺構は、調査区北部で検出した溝S D 101のみである。この溝はL字形に屈曲し、幅約1.5m、深さ20cm程度である。埋土内からは、弥生時代後期前半に相当する土器が出土している。遺構の形状から、方形周溝墓の一角である可能性が高い。

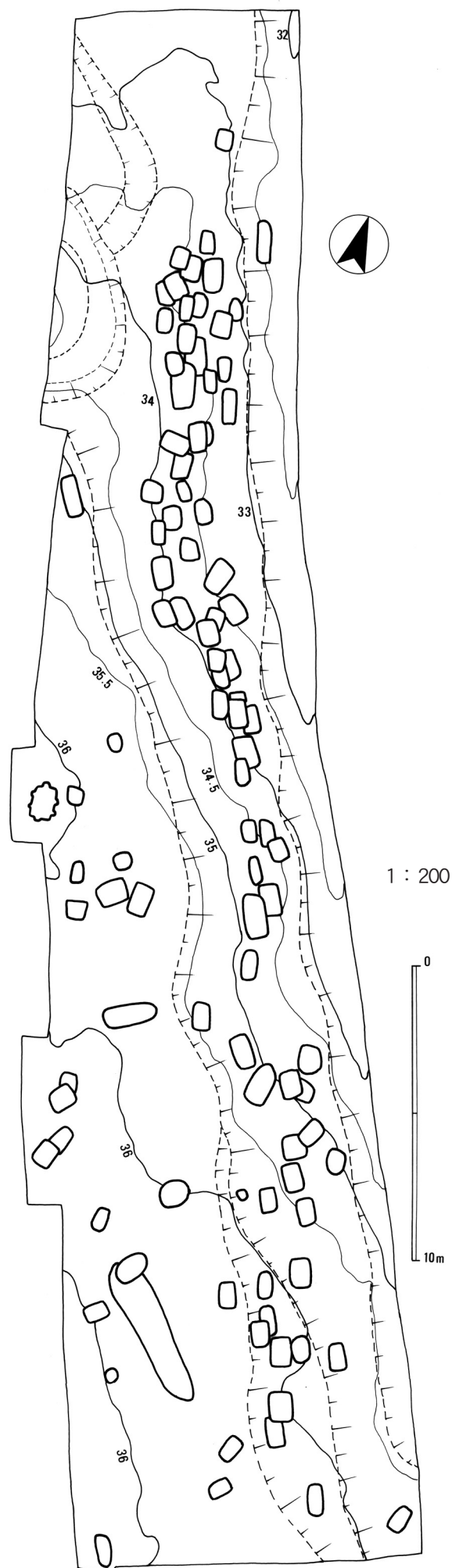
#### 3 城廻場古墳群

調査区北部で、2号墳に伴う周溝の一部を検出した。周溝幅は約2mである。埋土内からの遺物は無く、所属時期は不明である。



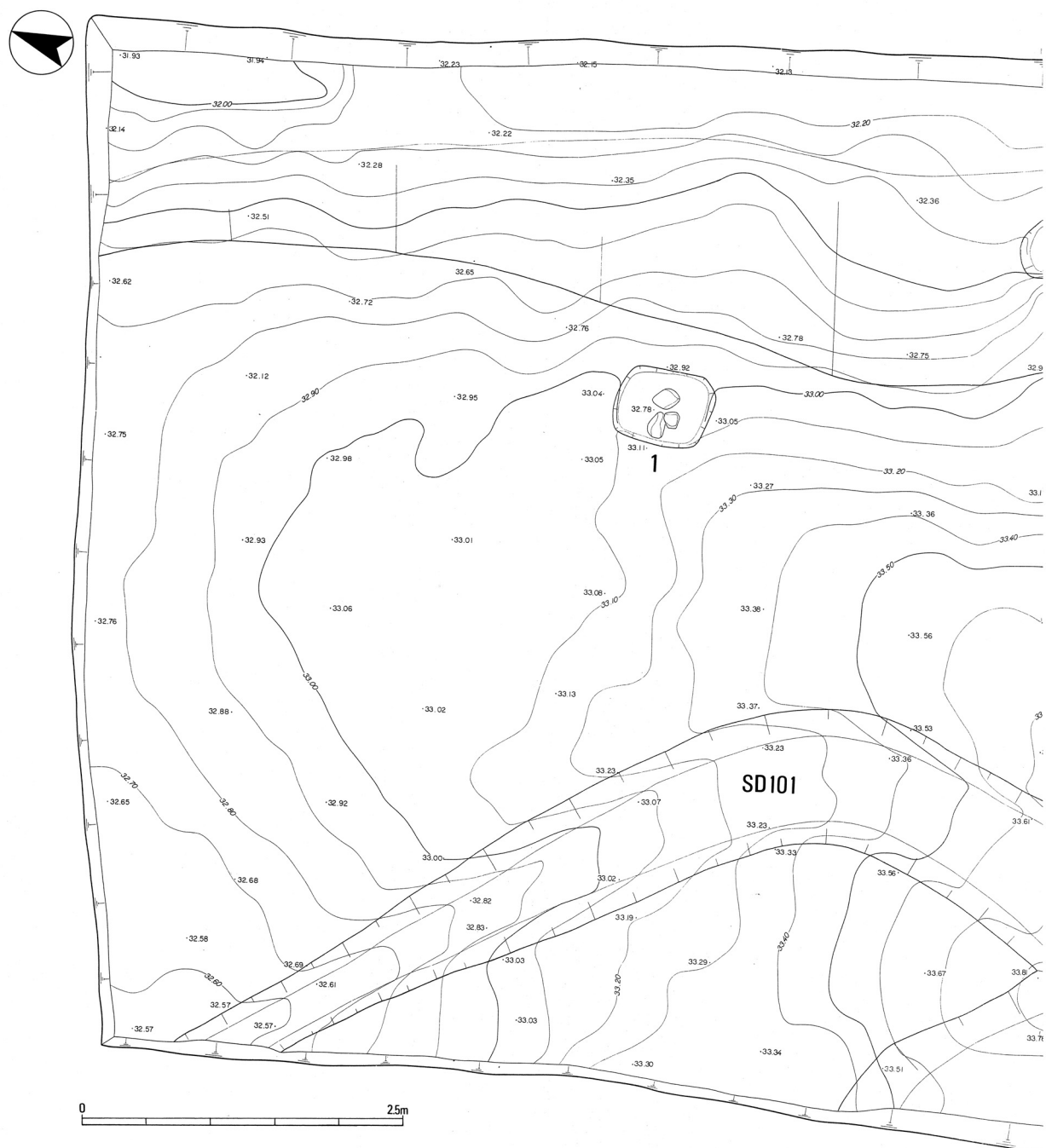
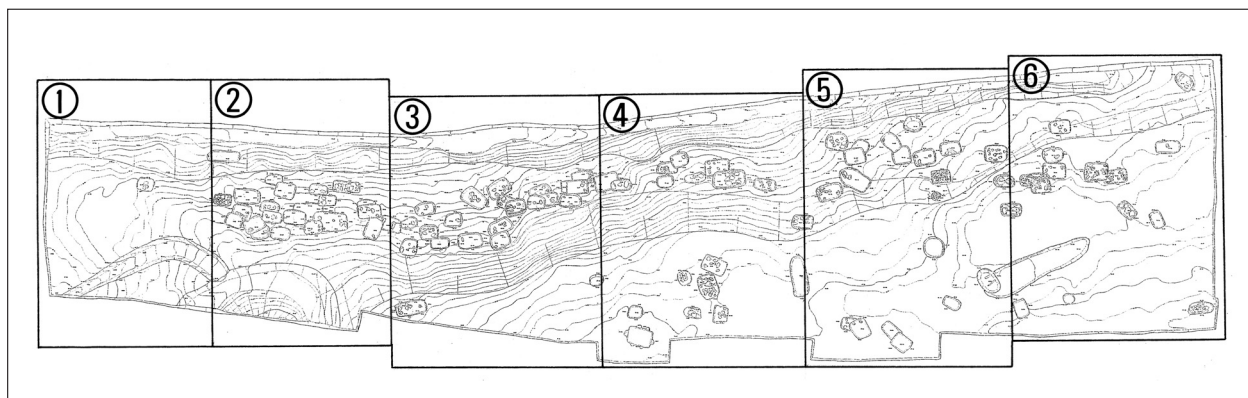


※黒ベタは範囲確認調査坑



第3図 事業地内調査区位置図および遺構全体図





第4図 調査区平面図① (1:50)

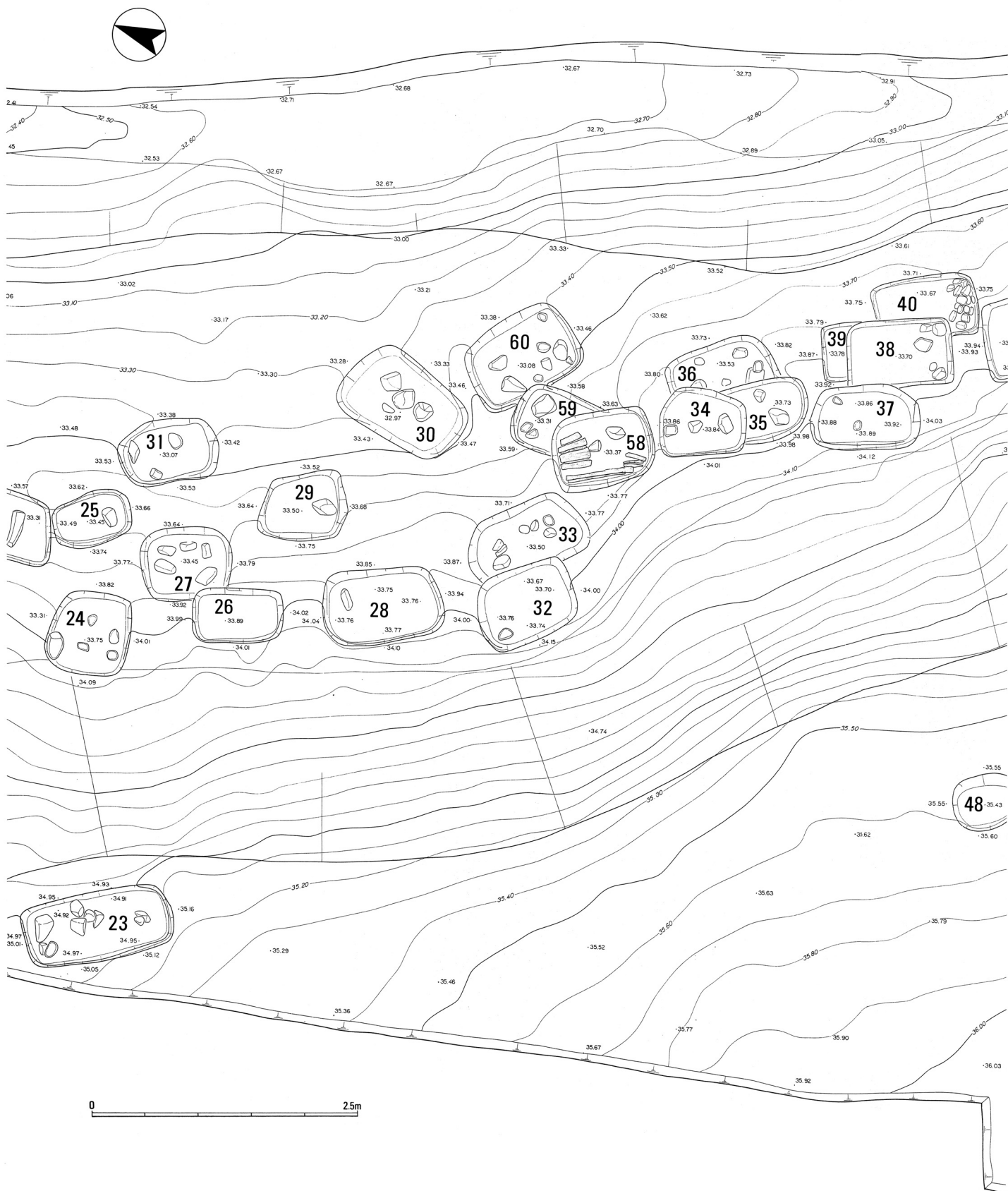
遺構略記号のうち、「SX」は省略した。



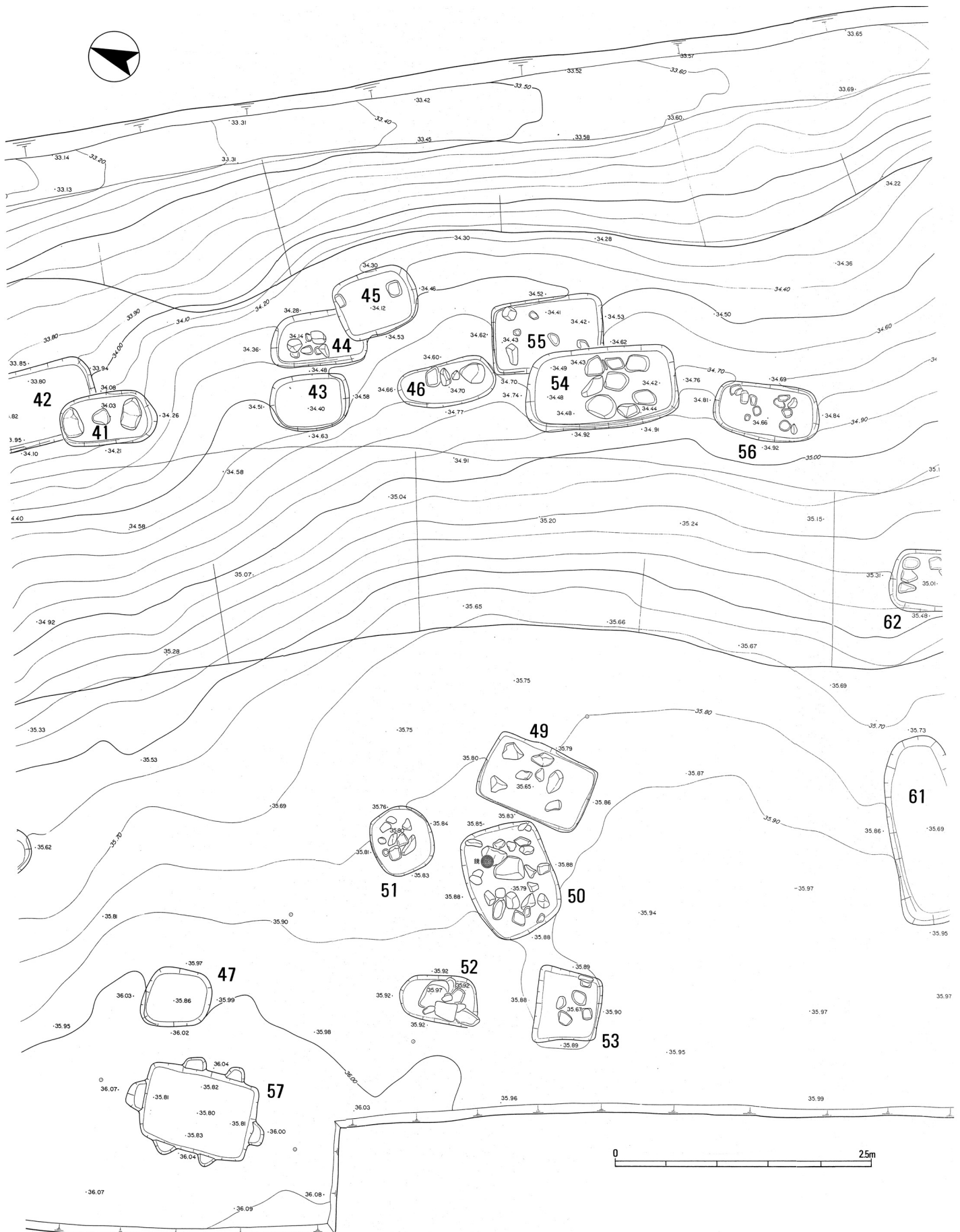


第5図 調査区平面図② (1 : 50)



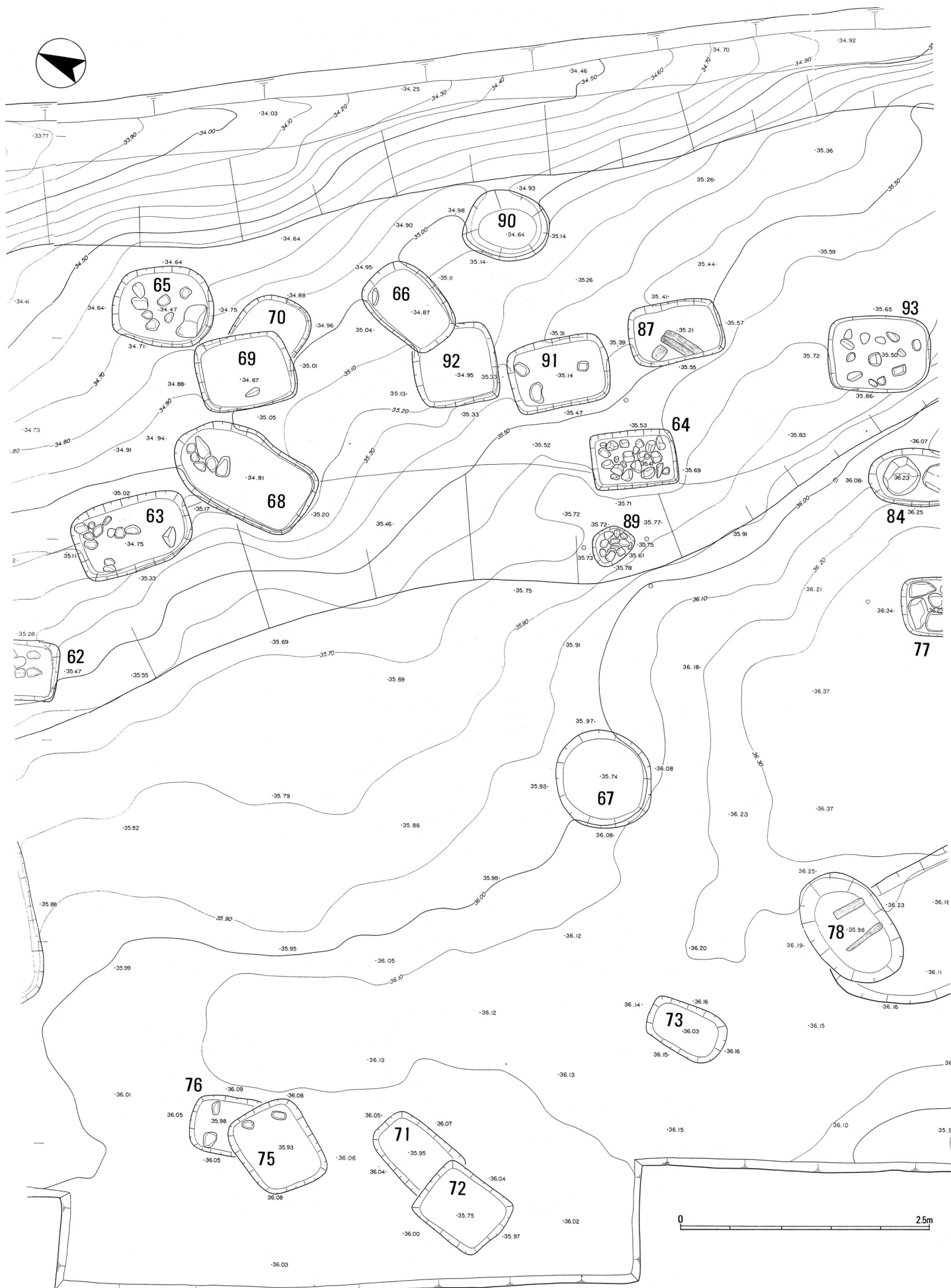


第6図 調査区平面図③ (1 : 50)

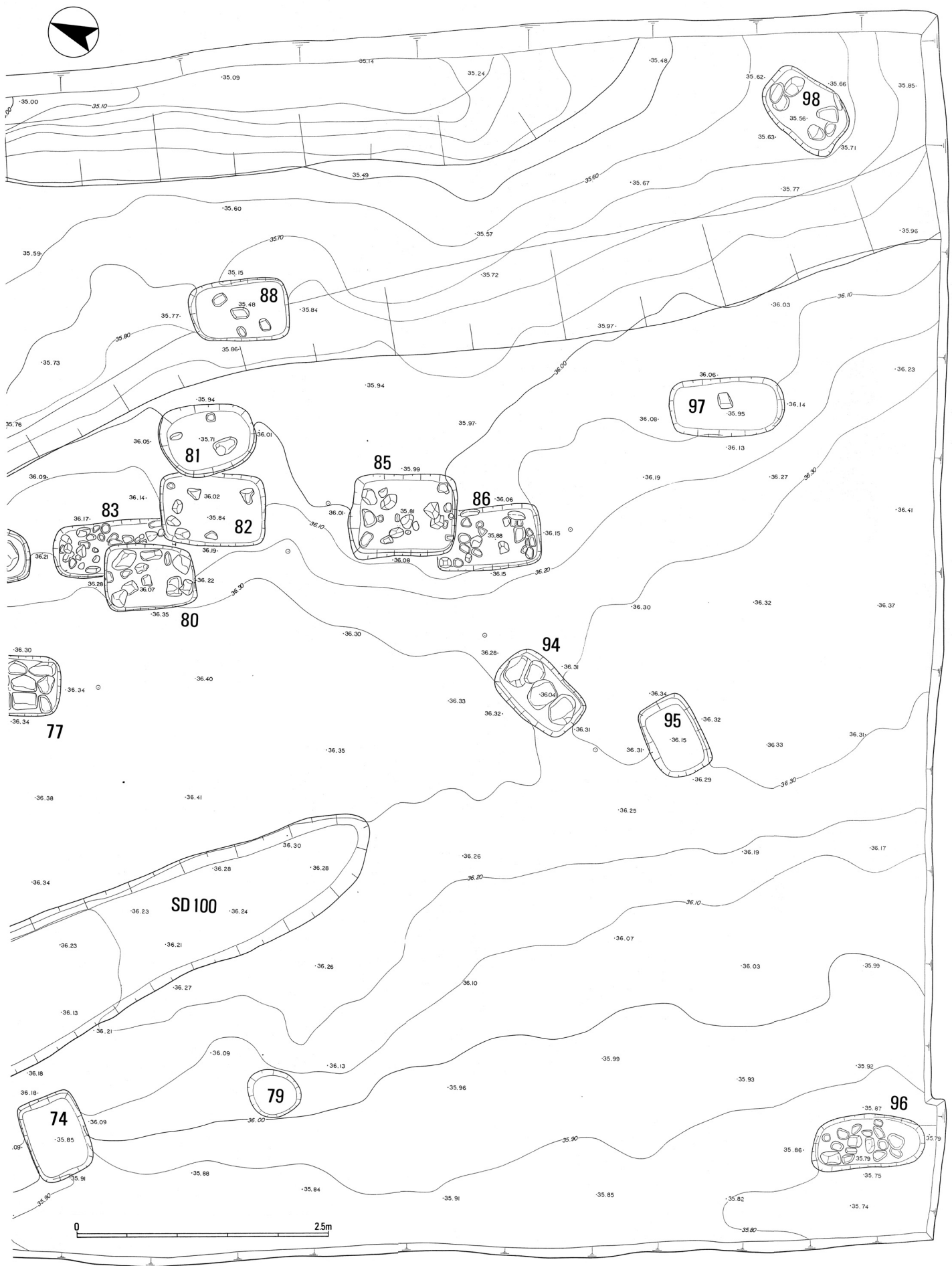


第7図 調査区平面図④ (1:50)



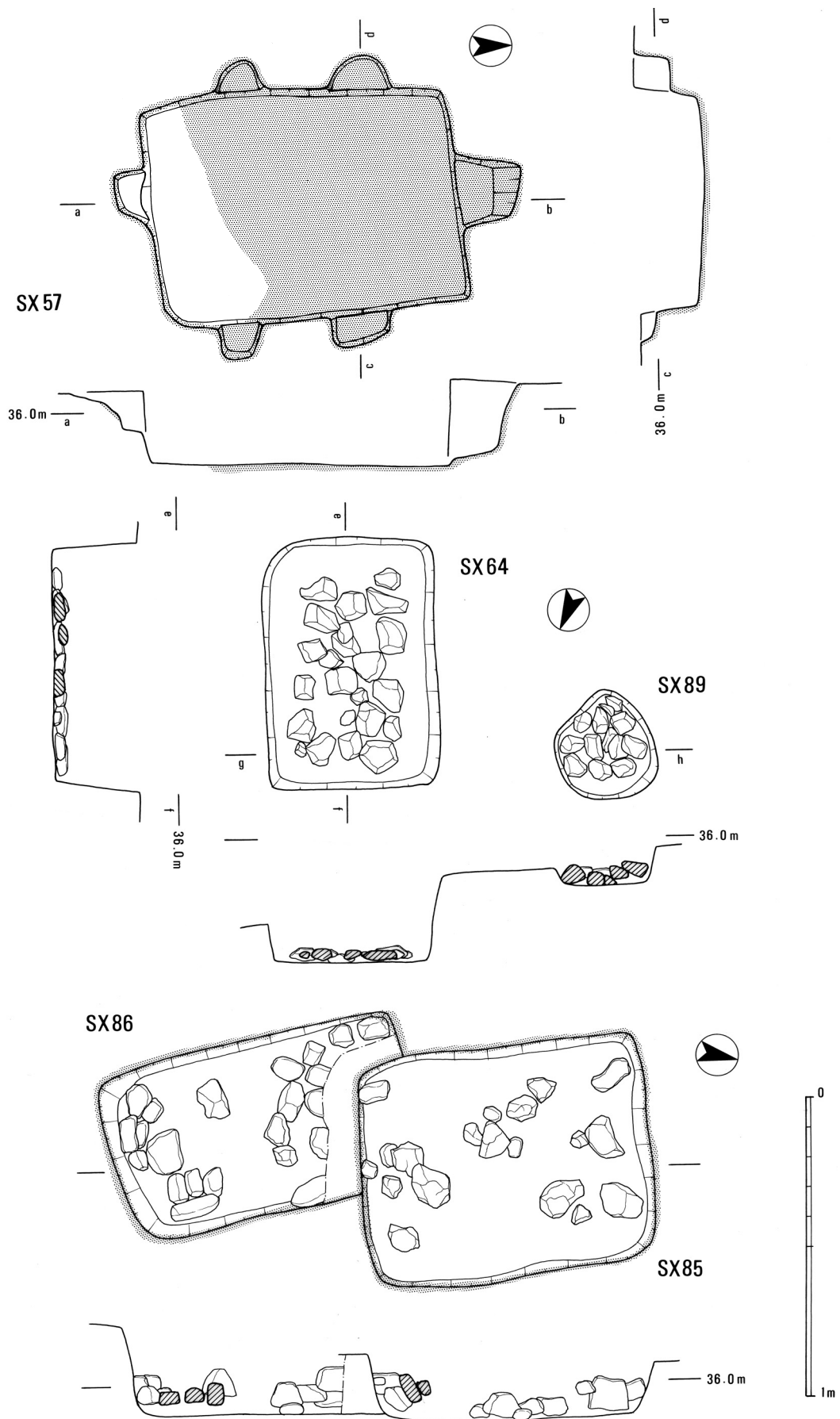


第8図 調査区平面図⑤ (1 : 50)

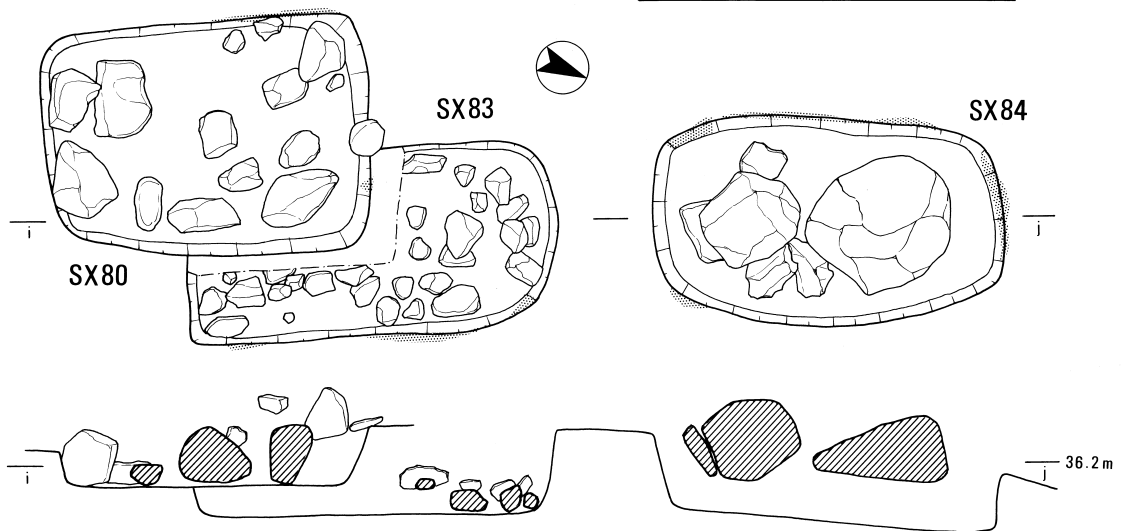
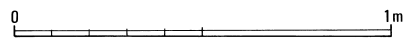
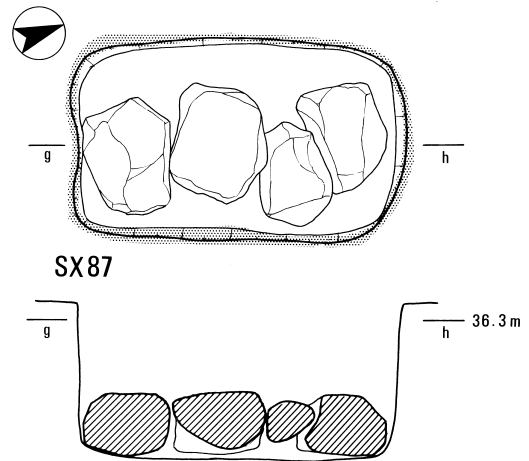
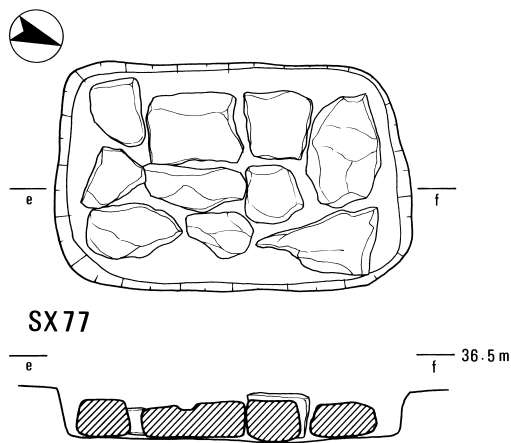
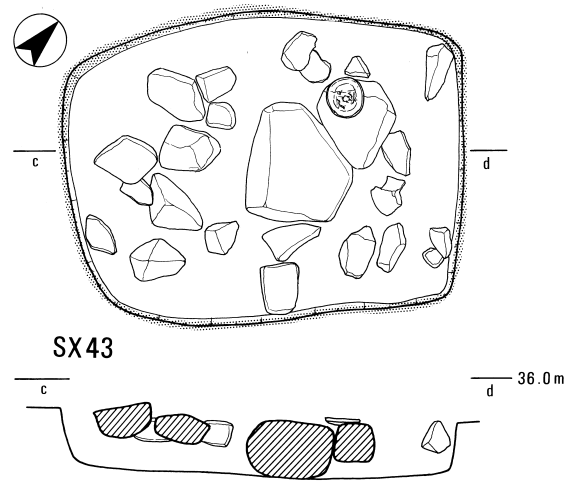
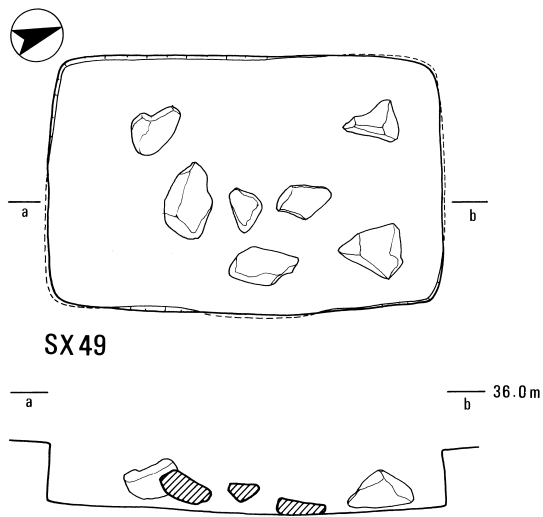


第9図 調査区平面図⑥ (1 : 50)





第10図 個別遺構① (1 : 20)



第11図 個別遺構② (1:20)



第1表 岡村中近世墓群ほか検出遺構一覧(1)

遺構番号	調査時 遺構番号	位置	遺構の状況			土壌墓内遺物				時期		備考
			形状	規模(長辺×短辺×深さ)cm	特徴	有機物	副葬品類	棺部材	その他	年代	土器	
SX1	遺構1	テラス	長方	74×59×30	石	骨						
SX2	遺構2	テラス	長方	122×70×35					土師器混入	15世紀後葉以降		
SX3	遺構2'	テラス	長方	79×53×35	石敷	骨			土師器混入			
SX4	遺構3	テラス	長方	76×61×40								
SX5	遺構3'	テラス	長方	88×68×20	石	骨			土師器混入			SX4・7より古
SX6	遺構4	テラス	長方	84×56×30	石	骨・炭			土師器混入	13世紀中葉以降		
SX7	遺構4'	テラス	長方	91×66×40	石	骨			土師器混入			SX6・8・9より古
SX8	遺構5	テラス	長方	86×51×20	石	骨			土師器混入			
SX9	遺構5'	テラス	長方	88×53×40	石	骨			土師器混入			SX8より古
SX10	遺構6	テラス	長方	91×70×40		骨			土師器混入	15世紀中葉以降		
SX11	遺構7	テラス	長方	81×51×25		骨						
SX12	遺構8	テラス	長方	86×56×45		骨			土師器混入	15世紀中葉以降		
SX13	遺構9	テラス	長方	102×65×20		骨			土師器混入			
SX14	遺構10	テラス	長方	134×77×20		骨			土師器混入	15世紀中葉以降		
SX15	遺構11	テラス	長方	78×48×35	石	骨			土師器混入			
SX16	遺構12	テラス	長方	86×48×20	石	骨						
SX17	遺構13	テラス	長方	84×61×20	石	骨						
SX18	遺構14	テラス	長方	156×86×40	石	骨	土師器小皿・皿	釘		15世紀中葉		
SX19	遺構15	テラス	長方	124×51×30	石	骨	土師器小皿			15世紀中葉		
SX20	遺構16	テラス	長方	98×71×40	石	骨			土師器混入			
SX21	遺構17	テラス	長方	104×62×30	石	骨						
SX22	遺構18	テラス	長方	92×64×55	石	骨						
SX23	遺構19	稜線	長方	141×66×20	石	骨						
SX24	遺構20	テラス	方	79×76×35	石	骨			土師器混入			
SX25	遺構21	テラス	長方	74×49×30	石	骨						
SX26	遺構22	テラス	長方	86×51×15		骨						
SX27	遺構22'	テラス	長方	85×68×50	石	骨						
SX28	遺構23	テラス	長方	112×69×35	石	骨						
SX29	遺構24	テラス	長方	81×64×25	石		土師器小皿・皿			15世紀中葉	Ⅲ b	
SX30	遺構24'	テラス	長方	118×75×50	覆石	骨	土師器小皿					
SX31	遺構25	テラス	長方	94×59×45	石	骨						
SX32	遺構26	テラス	長方	94×69×40	石	骨・炭	土師器皿			15世紀後葉	Ⅳ a	
SX33	遺構27	テラス	長方	114×65×40	石	骨						
SX34	遺構28	テラス	長方	81×62×15	石	骨						
SX35	遺構29	テラス	長方	？×58×25	石	骨						
SX36	遺構30	テラス	長方	101×？×25	石		土師器皿			15世紀中葉		
SX37	遺構31	テラス	長方	102×61×25	石	骨	銭貨23枚			近世		
SX38	遺構32	テラス	長方	100×63×30	石							
SX39	遺構33	テラス	長方？	？×55×15								
SX40	遺構34	テラス	長方	96×59×30	石	骨	土師器皿					
SX41	遺構35	テラス	長方	94×51×15	覆石	骨						
SX42	遺構36	テラス	長方	111×76×30		炭						
SX43	遺構37	テラス	長方	78×56×25		骨						
SX44	遺構37'	テラス	長方	96×54×35	石							
SX45	遺構38	テラス	長方	82×64×40	石	骨						
SX46	遺構39	テラス	長方	96×44×10	覆石	骨						
SX47	遺構40	稜線	長方	66×58×15		骨	土師器皿			15世紀前葉？	Ⅲ b	
SX48	遺構41	稜線	楕円	65×53×15								
SX49	遺構42	稜線	長方	108×72×15	石・被熱	骨	土師器小皿			15世紀中葉	Ⅲ b～Ⅳ a	
SX50	遺構43	稜線	長方	111×84×10	石・被熱	骨	鏡			15世紀中葉？		
SX51	遺構44	稜線	方	64×60×10	石・被熱	骨						

第2表 岡村中近世墓群ほか検出遺構一覧(2)

遺構番号	調査時 遺構番号	位置	遺構の状況			土壌墓内遺物				時期		備考
			形状	規模(長辺×短辺×深さ)cm	特徴	有機物	副葬品類	棺部材	その他	年代	土器	
SX52	遺構45	稜線	長方	74×48×15	覆石	骨						
SX53	遺構46	稜線	長方	71×64×15	石							
SX54	遺構47	テラス	長方	149×78×40	石	骨・炭						
SX55	遺構48	テラス	長方	110×71×30	石	骨・炭						
SX56	遺構49	テラス	長方	102×55×25	石	骨						
SX57	遺構50	稜線	突起付長方	111×84×55	被熱	骨・炭		釘	土師器混入			全面被熱
SX58	遺構51	テラス	長方	95×72×40	石・炭	骨	土師器小皿			15世紀中葉	Ⅲb～Ⅳa	
SX59	遺構52	テラス	長方	？×64×30	石	骨	小刀					
SX60	遺構53	テラス	長方	107×76×50	石	骨	土師器小皿・皿・小刀			15世紀中葉	Ⅲb	
SK61	遺構54	稜線	長方	185×74×25								
SX62	遺構55	テラス	長方	94×60×50	石	骨						
SX63	遺構56	テラス	長方	116×75×60	石	骨			土師器混入			
SX64	遺構57	テラス	長方	85×58×30	石	骨			土師器混入			
SX65	遺構58	テラス	長方	101×81×25	石	骨	土師器小皿・皿			15世紀中葉	Ⅲb	
SX66	遺構59	テラス	長方	96×66×25	石	骨						
SX67	遺構60	稜線	円	100×96×35								
SX68	遺構61	テラス	長方	146×81×40	石	骨・炭			土師器混入			
SX69	遺構62	テラス	長方	94×74×35	石	骨						
SX70	遺構63	テラス	長方？	？×71×？								
SX71	遺構64	稜線	長方	88×58×10		骨						
SX72	遺構65	稜線	長方	85×68×25		骨		釘	土師器混入	15世紀中葉以降		
SX73	遺構66	稜線	長方	82×48×15			土師器皿			15世紀中葉	Ⅲb	
SX74	遺構67	稜線	長方	82×60×65		骨			土師器混入	15世紀中葉以降		
SX75	遺構68	稜線	長方	91×75×15	石	骨						
SX76	遺構69	稜線	長方？	？×60×10	石	骨						
SX77	遺構70	テラス	長方	94×63×15	石敷	骨	土師器小皿・皿					
SX78	遺構71	稜線	楕円	124×81×25	炭	骨	土師器皿		土師器混入	15世紀中葉	Ⅲb	
SX79	遺構72	稜線	円	50×48×？		骨						
SX80	遺構74	テラス	長方	89×64×20	石敷・被熱	骨			土師器混入			
SX81	遺構75	テラス	長方	94×69×30	石・被熱	骨						
SX82	遺構76	テラス	長方	104×71×35	石・被熱	骨	土師器小皿・皿	釘		15世紀中葉	Ⅲb	
SX83	遺構77	テラス	長方	118×52×20	石・被熱	骨	鎌					
SX84	遺構78	テラス	長方	95×58×25	覆石・被熱							
SX85	遺構79	テラス	長方	104×80×20	石敷・被熱	骨						
SX86	遺構80	テラス	長方	104×63×30	石敷・被熱							
SX87	遺構81	テラス	長方	94×61×30	炭	骨						
SX88	遺構82	テラス	長方	91×61×40	石	骨	白磁碗			15世紀後葉？		
SX89	遺構83	テラス	円	41×35×12	石							
SX90	遺構84	テラス	長方？	83×70×50		骨						
SX91	遺構85	テラス	長方	101×70×35		骨						
SX92	遺構85'	テラス	方	84×81×40		骨						
SX93	遺構86	テラス	長方	102×76×35	石	骨						
SX94	遺構87	稜線	長方	93×58×40	覆石・被熱	骨・灰			土師器混入			
SX95	遺構88	稜線	長方	81×57×20								
SX96	遺構89	稜線	隅丸長方	114×53×10	石							
SX97	遺構90	稜線	隅丸長方	114×59×20	石	骨						
SX98	遺構91	テラス	長方	90×59×15	石	骨						
SX99	遺構92	テラス	長方	146×51×15		骨						
SD100	遺構73									15世紀後葉？		
SD101	A12SD						弥生土器			弥生後期		



## IV 出土した遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱に換算して約4箱である。内訳は、土器類が中心である。また、遺物ではないが、相当量の人骨も出土している。これらの遺物が出土した状態についても、第1～2表に示している。

### 1 城廻場遺跡出土遺物

城廻場遺跡出土遺物には、弥生時代中期後半から奈良時代のもものが認められる。

1・2は溝SD101から出土したもの。1は小形の壺、2は壺の底部である。これらは、弥生時代後期前半頃のものであろう。4は台付甕の脚台部で、これも弥生時代後期前半のものと考えられる。3は壺。袋状口縁を呈し、口縁部外面には刺突による綾杉文が施されている。弥生時代中期後葉か、後期前半頃のものであろう。5は土師器甕の口縁部片で、奈良時代頃のものである。

### 2 岡村中近世墓群出土遺物

**土器類** 土師器類は、いずれも南伊勢系のものである。土師器皿を伴う遺構では、SX32が南伊勢中世IVa期（15世紀後葉）にあたるが、それ以外はⅢb期（15世紀中葉）にあたる<sup>(1)</sup>。遺構外出土遺物のなかには、65～68のようにIVa期の新相に相当するものが含まれている。37は白磁の小椀。63は、Ⅲb期からIVa期頃に、櫛田川・宮川流域で稀に見られる土師器椀の口縁部である。

土器類は、基本的に火葬される前の段階で副葬されているものと考えられる。鍋類は被熱が激しく、全体が赤変している。皿類が比較的完形品で確認で

きるものが多いのに対し、鍋類は小片で確認されたものが多く、比較的確認しやすい口縁部ですら、完周するものは確認できなかった。このことから、鍋類は火葬の段階で棺上などの被熱し易い場所に置かれ、皿類は棺内の隅の方に入れられていたという可能性も想定できる。あるいは、鍋類は副葬品ではなく、葬送用具として用いられ破損したものが火葬坑内に入り込んだのかも知れない。

**石製品** 遺構外であるが、五輪塔の空輪の先端部が出土している(64)。石材は砂岩である。なお、今回の調査区で出土した五輪塔は、この破片が唯一のものである。

**鉄製品** SX59・60では小刀が出土している(25・28)。これらの小刀は小振りのもので、工具の部類に近い。SX83からは鎌が出土している(54)。また、SX57・84からは、棺の部材として用いられた釘が出土している。

**鏡** 74はSX50から出土した和鏡。焼け歪んでいる。直径約9.5cmの円形を呈する蓬莱鏡である。紐は花亀甲亀紐で、亀は左を向く。内側の圈線は中線の単圈で、圈線による内区・外区の区別は無い。縁の高さは約6.5mmで、蒲鉾式低縁である。

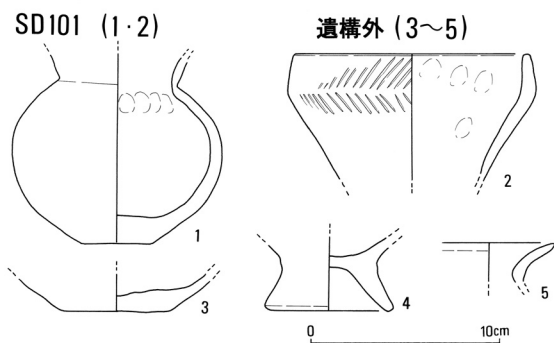
画郭左手には雌雄一对と見られる双鶴が描かれ、二羽ともに砂州上に降り立っている。右手には蓬莱山が波濤状の表現でなされる。下方には波濤文と流水文が描かれる。画郭左側からは外区沿いに緑竹が伸び、右側からは蓬莱山に根ざす松が伸びている。和鏡の年代は、概ね鎌倉時代後半頃と考えられる<sup>(2)</sup>。

**銭貨** 75～89は、SX37から出土した銭貨。いずれも寛永通寶である。

#### <註>

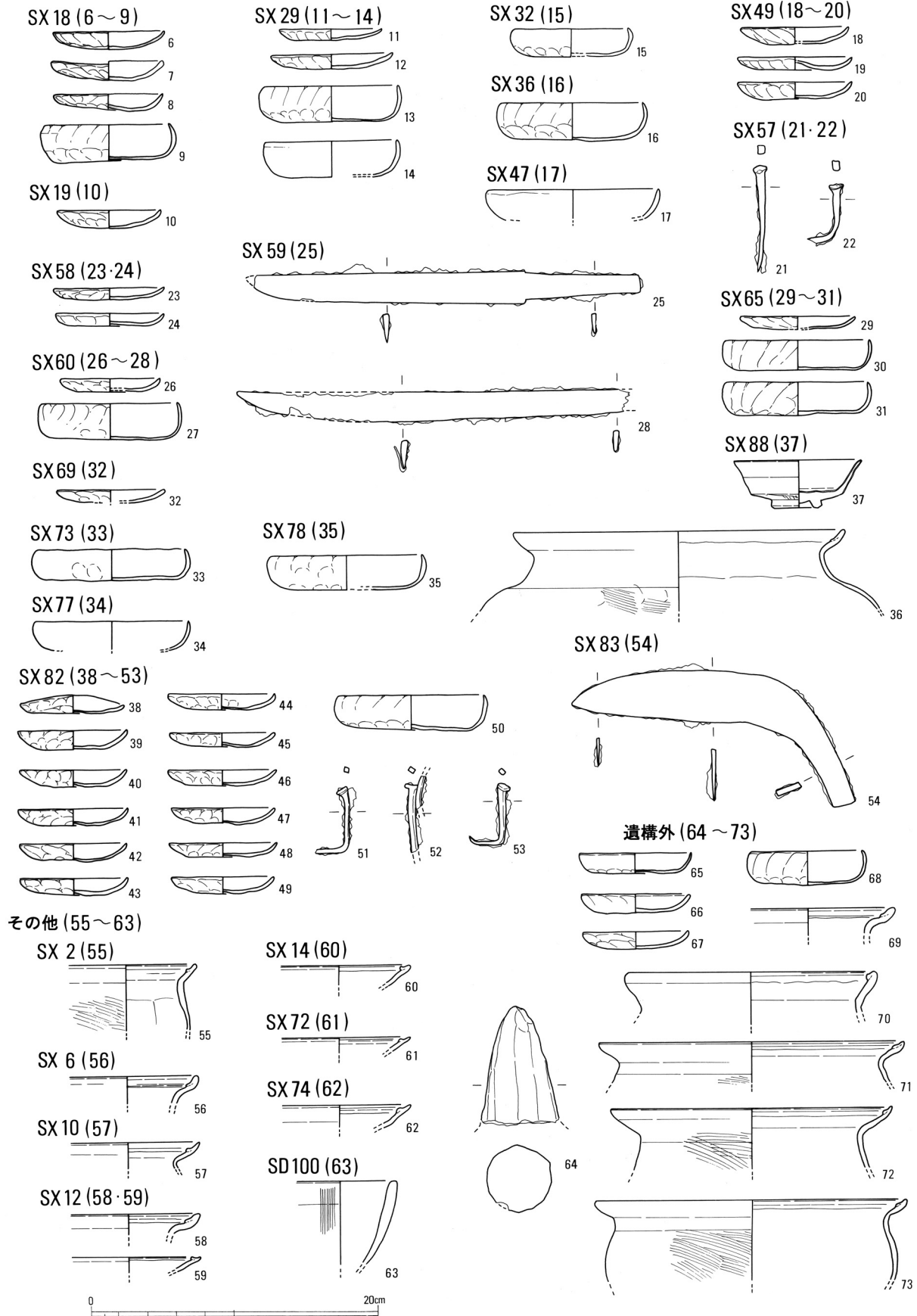
(1)土師器類の時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」(『関東、東海における中世土器(煮炊具)の最近における研究成果』静岡大学 2005年)に拠る。

(2)和鏡の記載については、広瀬都巽『和鏡の研究』(角川書店 1974年)を参照した。



第12図 出土遺物(1)弥生・古代

副葬品類 (6 ~ 54)



第13図 出土遺物(2)土器類・鉄製品類ほか (1 : 4)

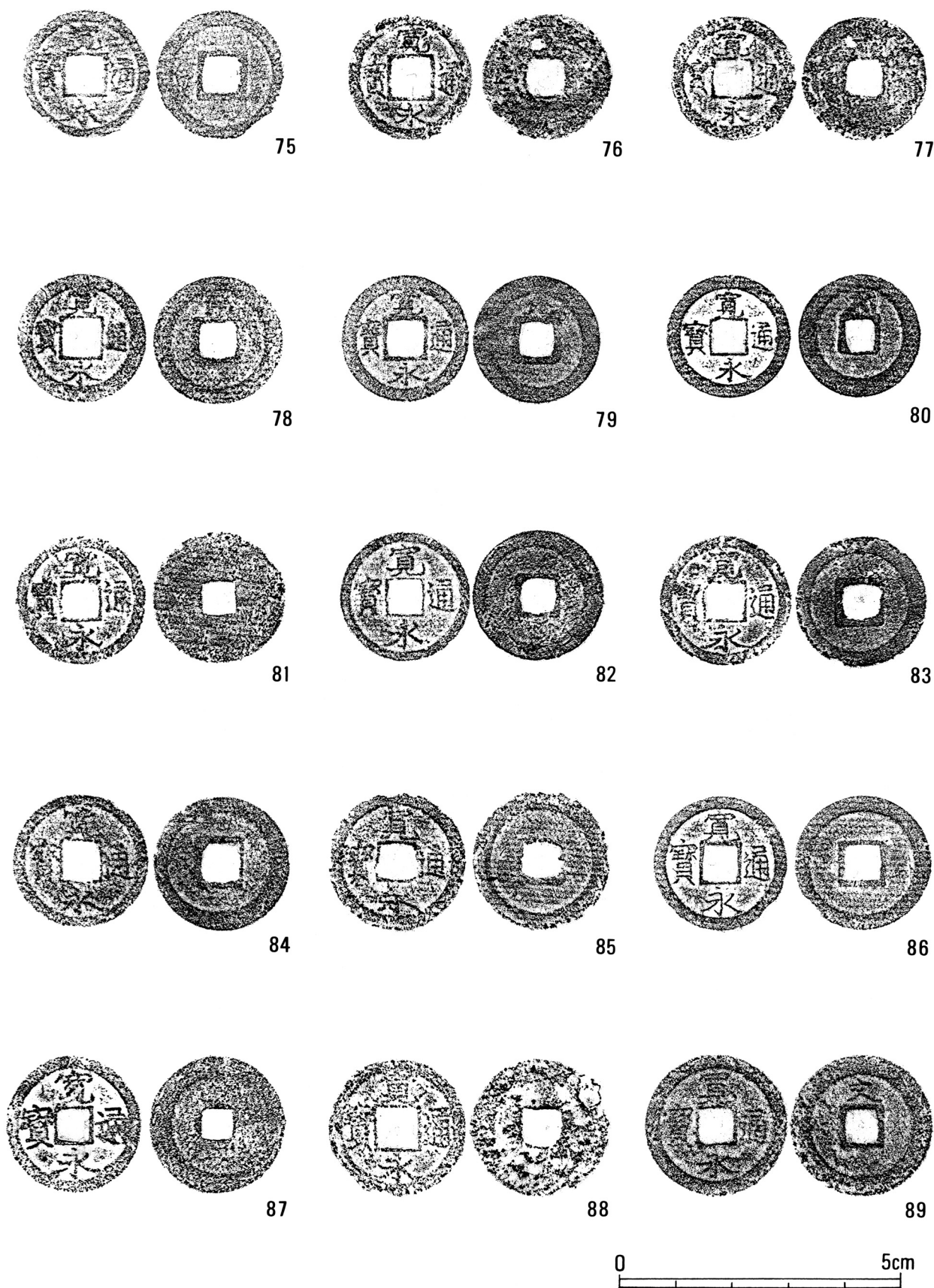


SX50(74)



第14図 出土遺物(3)和鏡 (1:1)

SX 37 (75~89)



第15図 出土遺物(4)銭貨 (1:1)



## V 岡村中近世墓群の歴史的意義

ここではまとめとして、岡村中近世墓群の持つ意義について触れておく。

### 1 火葬坑群の状況と性格

今回の発掘調査における最大の成果は、中世後期を中心とする火葬坑群が検出されたことである。火葬坑は丘陵尾根沿いに群集し、合計99基を確認した。これらは、大きく見ると丘陵尾根筋に沿って展開する一群（A群；19基）と、その東斜面に形成された幅3m程度のテラス状部に展開する一群（B群；80基）に分けることができる。A群には、鏡が副葬されるS X 50や、突起を持つ棺を用いたS X 57のようなものがあり、B群に比べてやや優位な状況が観察できる。

これらの火葬坑群は、土坑内から火葬人骨が出土していることから見ても、茶毘の場であると見てよい。遺構の状況から見て、土坑は棺の大きさとほぼ同じで、石を敷いたり、あるいは石で押さえたりしたものがあつたことがわかる。

遺構規模は第16図に示したような分布を示している。その規模は、長さ70～120cm、幅50～80cm程度のものが中心と考えることができる。この土坑内に棺が収められているのであれば、必然的に土坑規模よりも一回り小さい棺であることになる。そうすると、棺の大きさは長さ60～110cm、幅40～70cmほどと考えることができる。

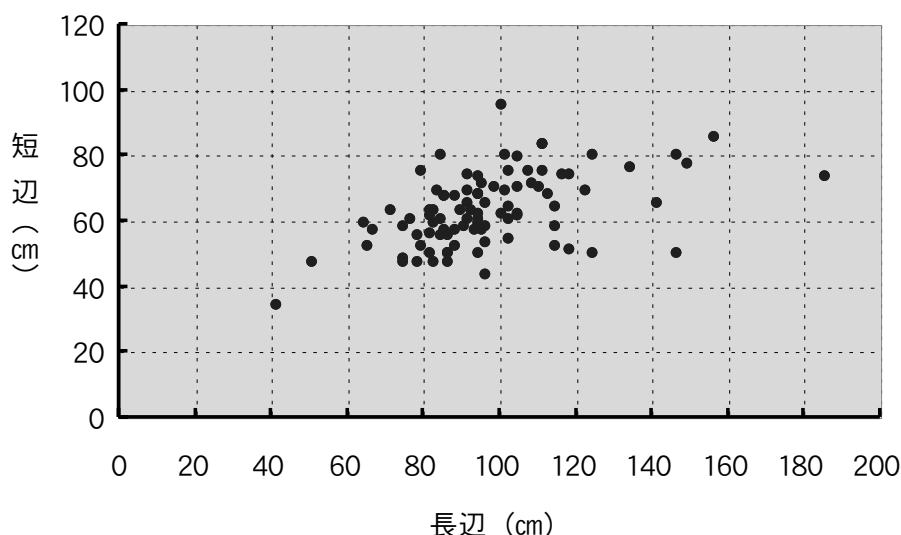
棺の規模をこの程度と考えた場合、遺骸がこの中に伸展葬で納められたとは考えにくい。おそらく、やや足を曲げた状態で棺内に安置されていたものと考えられる。中世墓ではこのような埋葬スタイルが数多く確認できる<sup>(1)</sup>ことから、岡村中近世墓群についても同様な傾向を示していると見てよいであろう。

### 2 出土遺物の状況と性格

出土遺物で最も多く確認できたのが土師器類で、なかでも皿類が中心である。概ね中世後期、より限定すれば15世紀前葉から後葉にかけてのものが多く認められた。土師器以外のものは数少なかったが、白磁碗、小刀類、鏡なども見られた。これらの遺物は火葬坑内から出土したものが多く、基本的には副葬品と見てよいであろう。

ただし、副葬される土師器には時期的な傾向が存在しているようである。火葬坑内から出土する土師器皿類は、概ね南伊勢中世Ⅲb期<sup>(2)</sup>を中心としたものである。しかし、遺構に伴わない状態の土器には、南伊勢中世Ⅳa期でも新相（15世紀末～16世紀初頭頃）のものが数点見られる。遺構に伴わない遺物も含めれば、当地での火葬（茶毘）は、16世紀初頭頃までは継続して行われていたものと考えられる。つまり、茶毘の際に副葬品として土器を納める行為は、16世紀初頭頃を境に、次第に衰退していったと考えられる。

墓に土器を副葬する行為は、近世でも継続して確認できる<sup>(3)</sup>ので、墓そのものに副葬されなくなったわけではない。岡村中近世墓群で認識できるのは、火葬坑に対する副葬行為の変化なのである。



第16図 岡村中近世墓群火葬坑の規模一覧

### 3 火葬坑 S X 50 出土の和鏡

S X 50 出土の和鏡は、蓬莱鏡としての図柄は通常よく見られるものであり、意匠として定まっていたのではないかと考えられる。同種の和鏡は鹿児島県新田神社に 5 面見られ、極めて近似した画郭構成である<sup>(4)</sup>。近隣では、伊賀市菅原神社所蔵の和鏡にほぼ同意匠のものがある<sup>(5)</sup>。新田神社所蔵の和鏡は、鎌倉時代後半頃のものと考えられており、S X 50 出土和鏡についてもほぼ同じ時期と見てよいであろう。ただし、遺構としての S X 50 は 15 世紀前半頃と考えられるため、この鏡は伝世品と見るのが妥当である。

### 4 火葬坑群の性格

岡村中近世墓群は、基本的には「茶毘の場」と認識できる。菟上遺跡（四日市市）でも当遺跡と同様の火葬坑群が検出されており<sup>(6)</sup>、火葬坑内の遺骨は一部収骨された状況が確認されている。つまり、蔵骨器に納められて埋葬される「墓地」が、茶毘の地とは別に設けられていると考えられる。岡村中近世墓群では人骨分析を行っていないが、基本的には菟上遺跡と同様な施設群と考えられよう。

茶毘に際しては、鏡・小刀などの副葬品を伴うものもある。S X 50 から出土した鏡は激しく熱変しており、副葬品を入れた状態で火葬されたことを示している。ここから、火葬地そのものも葬地として認識されていたと見ることができる。

つぎに、火葬坑の群集形態である。火葬坑の確認事例はいくつかある<sup>(7)</sup>が、その多くは単独もしくは数基程度の群集である。岡村中近世墓群や菟上遺跡のような群集形態が確認された事例は数少ない。また、一般に火葬坑から出土する遺物は極めて少なく、所属時期が特定できないものが多いが、そのなかにあつて岡村中近世墓群のように、ある程度の時期が特定できる事例は稀である。

単独の火葬坑が存在することを踏まえると、岡村中近世墓群の事例は、集団による火葬地であるといえる。つまり、火葬という葬送方法が集団として受容されたことを示している。

さて、「茶毘の場」と「蔵骨の場」という 2 箇所

の葬地が出現することは、近現代の民俗事例に見られる「両墓制」との関連をも考える必要がある。両墓制は「埋め墓」と「参り墓」の 2 箇所であり、岡村中近世墓群をそれを完全に同一視することはできないが、いずれも集団としての葬地が存在することには注意が必要である。

岡村中近世墓群は、葬送方法としての火葬を集団として受容した状況を明確に示す事例として特筆できる。その形成主体は、鏡・白磁・小刀などを有する被葬者についてはやや階層的に上位の物を想定できるが、圧倒的大部分は何も副葬されない被葬者である、そして、それらがとくに大きな差をなさずに混在している状況が注目できる。

これらのことから、岡村中近世墓群を形成した集団とは、一定の紐帯を有した「惣村」的な集団であったものと考えることができよう。そしてその集団とは、遺跡の所在する位置から見ても、現在の岡村集落の前身と考えるのが最も適切であろう。

### 5 過去と現在の間に横たわる空白

現在、岡村集落の墓地が、岡村中近世墓群のすぐ東側に形成されている。しかしそこには、五輪塔をはじめとした石塔群は見られない。岡村集落の中にある滋照寺（現在は無住）の裏手にある墓地では、わずかな五輪塔が見られるものの、その数はあまりにも少ない。大規模火葬坑群が作られた直後の 16・17 世紀の状況が空白なのである。岡村中近世墓群を正しく評価するために必要な検討課題としてここに提示しておく。（伊藤裕偉）

#### <註>

(1) 中世墓の埋葬形態については、中世墓資料集成研究会編『中世墓資料集成—中部・東海編—』（2005 年）を参照した。

(2) 中世の時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」（『関東、東海における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』静岡大学 2005 年）に拠る。

(3) 近世墓に土師器が伴う状況は、志摩市・浄土近世墓地の発掘調査により、墓壇内から土師器皿類や尾張系焙烙が多数出土している事例が確認されている。平成 16 年度三重県埋蔵文化財センター調査。

(4) 相山林継ほか「薩摩の神社奉納鏡〜大形和鏡を中心として〜」（『國學院大学考古学資料館紀要』第 14 輯 1998 年）

(5) 館邦典「菅原神社所蔵の和鏡」（『伊賀市文化財年報 1』2005 年）

(6) 三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』（2005 年）

(7) 例えば、松阪市・天花寺中世墓群（三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』Ⅳ 2000 年）、鈴鹿市・居敷遺跡（三重県埋蔵文化財センター『居敷遺跡発掘調査報告』1996 年）など。

# 報告書抄録

ふ り が な		たまききゅうりょうのちゅうせいかそうこうぐん						
書 名		玉城丘陵の中世火葬坑群						
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名		研究紀要						
シリーズ番号		15－4						
編 著 者 名		伊藤裕偉						
編 集 機 関		三重県埋蔵文化財センター						
所 在 地		〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)7031						
発 行 年 月 日		2006年3月28日						
ふりがな	ふ り が な	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
おかむら ちゅうきんせい 中近世 ぼくろ 墓群  じょんばいせき 城廻場遺跡  じょんば 城廻場 こふんぐん 古墳群	わたらいぐんたまきちょう 度会郡玉城町 おかむら じょんば 岡村字城廻場	24461	461	34° 29′ 50″	136° 37′ 25″	19901001～ 19910113	500	県道田丸停車場 齊明線道路 改良工事
				363				
				220				
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
岡村中近世 墓群	墓跡	室町戦国 江戸	火葬坑群		和鏡・土師器・白磁・ 鎌・小刀		火葬坑群密集形態	
城廻場遺跡	集落跡	弥生後期	溝		弥生土器		方形周溝墓か？	
城廻場 古墳群	古墳	古墳 後期？	古墳		なし			
要  約	岡村中近世墓群では、合計 99 基の火葬坑群が検出された。時期的には室町・戦国期の 15 世紀後半から 16 世紀初頭頃が中心である。副葬品には和鏡や白磁・鉄鎌・小刀などが見られるが、全体的に少ない。この遺跡からは石塔がほとんど確認されていない。このことから、ここで検出された火葬坑群は「茶毘の場」と考えられ、その一部が収骨されて別の場所に葬られているものと考えられる。群集形態からは、「惣村」ないしは「惣郷」による集団火葬場と考えられ、当時の葬送を研究するうえで重要な資料になると考えられる。							
	同じ調査地にある城廻場遺跡・城廻場古墳群についても、その一角が調査された。城廻場遺跡では弥生時代後期の方形周溝墓と考えられる溝、城廻場 1 号墳では、周溝の一部が検出された。							





全景（南から）



全景（北から）





S X 49~51 (北から)



S X 30~40付近 (北から)





S X 77・80～84付近（東から）



S X 13～19付近（南から）





74

S X 50 出土和鏡



出土土器類